

タイトル：2021 年度研究セミナー（第 22 回）

日時：2021 年 12 月 17 日（金）～18 日（土）

オンライン開催

「前近代アラブ・イスラーム社会における「同性愛者」像の生成—ある大法官への中傷言説を巡って—」

辻大地（九州大学大学院）

この度、博士課程に進学して 4 年目ではじめて、本セミナーに参加しました。生来の楽天的な性格のために、のんびりと勉強を進めてきた私にも、ようやくおぼろげながら博士論文という壁が見え始め、焦って応募したというのが実情です。これまでの感想を拝見すると、もっと早くに参加しておけば良かったと書かれている方が多いようです。しかし、個人的には現時点での参加は良いタイミングだったと感じました。限られた紙幅ですので、以下では現時点の私自身の状況と参加時期に話題を絞って感想を書いてみたいと思います。セミナーへの参加を考えている方の、参考になれば幸いです。

今回発表した内容は、執筆予定の博士論文の 1 章分に序論を組み合わせたものです。博論の章構成や序論について大まかには考えていたものの、本セミナーの応募書類の作成を通じて、これまでに刊行した論文を中心に三部構成とする案を明確にすることができました。それを踏まえ、今回の発表では特に手付かずだった第3部の最後の章について発表し、ご意見を頂戴して方針を固めようと考えた次第です。

今回、これまでの学会などでの発表と最も異なった点は、博論の一部であることを強く意識して報告を行えたことでした。本セミナーの特徴に博士論文の執筆に焦点が置かれている点があります。60 分という発表時間も、博論全体の構成と、今回の報告がどこに位置付けられるのかを説明した上で、1 章分をまとめるのにちょうどいい塩梅に設定されていると思います。実際、教育セミナーと比較すると博論執筆という目的が共有されている分、議論も具体的な方法面に集中したように感じます。また、博論全体の目的や先行研究とのバランスなど、個別の問題に留まらない、より広い視野からの質疑やアドバイスを頂くことができました。

以上を受け、個人的には、ある程度博士課程を進めた段階で本セミナーを受講することも前向きな選択肢だと思います。自分自身の例で考えると、実際に各章の土台となる論文をいくらか書いてみて、博論全体における自分のやりたいことやその伝え方、そして能力的・史料的な制約がようやく少しずつわかってきたと感じています。そうした意味で、私の場合は、博士課程に進学したばかりの段階でセミナーを受講するよりも、ある程度全体像を見通すことができたら報告する方が、より充実した議論を行うことができたように感じました。もちろん、もっと早くに色々ご意見を頂くことで、

より博論が進んでいたのかもしれませんが、徒に急ぐだけが最善だとは限らないと思った次第です。

さて、ほとんどが雑感となってしまい恐縮に存じます。特に本稿では詳細を触れられませんでした
が、細田先生のご講演や他の受講生の方々のご発表からは大きな刺激を頂きました。またセミナー後の懇親会は、様々な楽しいお話の間に、研究活動の実践的なアドバイスや励ましのお言葉が溢れ、とても有意義な時間を感じられました。懇親会の席で、ある先生から頂いた「まあ今日の発表は、頑張れば研究ノートぐらいにはなるんじゃないの」というお言葉を、褒め言葉と捉えるのは楽天的に過ぎるでしょうか。ともあれ今後とも博論執筆に向けて精進していきたいと思います。最後になりましたが、本セミナーを開催して下さった事務局の方々と先生方に厚く御礼申し上げます。